

大妻精神の継承と具現

—聞き取り調査を通じ大妻の教え・学びを探る 4—

Devolution and Realization of Otsuma spirit
Through interview survey-Looking for our Otsuma's mind, telling and way

高垣 佐和子¹, 井上 小百合², 井上 俊也³
Sawako Takagaki¹, Sayuri Inoue², and Toshiya Inoue³

¹大妻女子大学博物館大妻コタカ・大妻良馬研究所
²一般財団法人大妻コタカ記念会, ³大妻女子大学キャリア教育センター

キーワード：大妻コタカ, 大妻精神, 聞き取り調査

Key words : Kotaka Otsuma, Otsuma spirit, Interview

1. 研究目的

大妻コタカ・大妻良馬が創設した大妻学院は2018年に創立110周年を迎えた。

2020年には学祖大妻コタカ没後50年を迎え、大妻コタカの教えを受けた方々も高齢となった今、早急に大妻コタカの教えを受けた方々、交流のあった方々から聞き取りを行い、大妻コタカの遺した業績および建学の精神を次世代へ継承し、発展させることは、大妻学院にとって極めて重要であると考えられる。

高垣らはこれまで卒業生対象の座談会やアンケート調査等により、大妻コタカから受けた直接的な教え、また大妻での学び・教えなどを同窓会誌他で明らかにしてきた。

更に、2016、2017年度の共同研究プロジェクトにおいて、卒業生および大妻コタカと交流のあった方々に対し、聞き取り調査を実施し、その結果、大妻精神は「自分を磨くこと」、「学び続けること」、「女性の鏡」、「らしくあれである」といったキーワードを引き出すことができた。

ひいては大妻精神が卒業生個々の人生に影響を与え、現在なお息づいていることを明らかにした。

2018年度の共同研究プロジェクトにおける研究では、「出張博物館」を大妻コタカのふるさと広島県世羅郡世羅町の『大田庄歴史館』に於いて、これまでの調査成果をふまえた大妻教育の展示を実施。

その展示には、大妻コタカに関心のある方々が来場し、これまで知り合うことのできなかった大妻コタカと関わった方々、世羅町に所在した大妻女子専門学校で学んだ方々などの新たな聞き取り対象者を獲得できた。

そして、本研究の趣旨を理解いただき、新たな聞き取り調査対象者を獲得し、聞き取り調査を実施することができた。

また、本展示を紹介する数回の新聞報道により、想定外に広く多くの方々に「大妻」を知っていただくこととなり、展示に足を運ぶことが出来なかった大妻コタカゆかりの方々から、後日連絡をいただくなど、新たな聞き取り対象者を獲得出来、調査研究を進めることができた。

2019年度の調査研究では、大妻コタカの教えを受けた方々、交流のあった方々の掘り起こしをしつつ、聞き取り調査・実地調査を進め、大妻コタカの女子教育に尽力した姿、および大妻コタカの教育を受けた方々がどのようなキャリアを積み、大妻精神をどのように継承したかを一つ一つ紡ぎ、次いで大妻精神の研究を進め、継承し発展させてゆくことを目的とした。

2. 研究実施内容

本研究では、一般財団法人大妻コタカ記念会、および大妻地方同窓会などの協力を得て、卒業生、大妻コタカと交流のあった方々、および大妻コタカの親戚を紹介いただき地元において聞き取

りおよび現地調査を実施した。

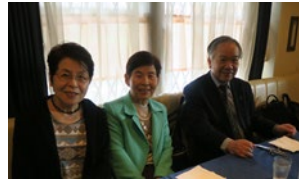
更に2019年度は、大妻コタカ記念会・大妻女子大学博物館主催、大妻コタカ先生顕彰会共催、世羅町・世羅町教育委員会後援により、大妻コタカの故郷に於いて開催された「域学連携講演会 大妻コタカ～世羅が生んだ教育者」の講演会聴講者から、新たな聞き取り対象者を獲得し、聞き取り調査も実施した。

次に聞き取り調査実態を時系列で示す。

(1) 2019年4月24日：一般財団法人大妻コタカ記念会館（東京都千代田区三番町14-11）に於いて、元給費生2名と大妻コタカの故郷である旧久恵集落（現広島県世羅郡世羅町川尻）の元住民1名から聞き取り調査。

元給費生からは、1964年頃の給費生の生活と大妻コタカとの関わり、卒業後の様子。

旧久恵集落住民からは、当時の生活とその後について聞き取り。



(2) 2019年5月15日：割烹いづみ（長野県伊那市西町）に於いて、大妻同窓会長野会員24名から大妻女子大学へ進学した理由と寮生活から得たもの等を聞き取り調査。

大妻女子大学へ進学した理由として、多くが両親・学校の先生の勧めであると回答。寮生活から得たものでは、厳しいこともあったが、後の人生の原点は寮生活であるとの回答。

また、高校を卒業後、厚生省に勤務しキャリアアップのために大学の夜間部へ進学。中央大学の夜学にも合格したが、授業料が大妻の方が安く、経済的な理由で大妻に進学した。

仕事と勉学の両立は大変だったが、大妻では、夜学でも運動会や北海道旅行などがあり、学生生活も謳歌できたことは、ありがたい事であった。

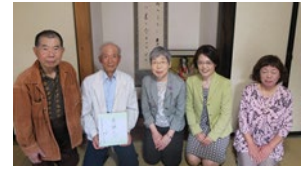


(3) 2019年5月16日：高見邸（長野県伊那市東春近）に於いて、高見ふみ江親族から聞き取り調査。

大妻コタカのアルバムに、大妻コタカと高見ふみ江氏との関わりを示す写真が多数あり、2017

年から長野県伊那市出身をキーワードに、大妻同窓会長野会員へ調査の協力を求めている。

その結果、2018年になり、高見ふみ江氏の親戚に辿り着くことが出来、大妻同窓会長野の遠山淳子代表の協力を得て、2019年に聞き取り調査を実施。



(4) 2019年6月8日：安福寺（広島県府中市上下町矢野）に於いて、1969年3月から4年間、大妻学院で夜警バイトとして校舎内に居住し、昼間は大学へ通学した大妻コタカ親戚から大妻学院へ行った経緯、熊田家について聞き取り調査を実施。

併せて、同時期同様に世羅町から夜警バイトに従事し大学に通学した2名からも大妻学院へ行った経緯などを聞き取り調査。

また、現在広島県府中市上下町周辺在住の元給費生3名から、給費生となった経緯、大妻での様子などの聞き取り調査を実施。



(5) 2019年6月9日：世羅町甲山自治センター（広島県世羅郡世羅町大字西上原）に於いて、世羅町大妻コタカ先生顕彰会の方4名から世羅町立大妻女子専門学校に来校された折の大妻コタカとの関わり、校長代理をつとめられた熊田陸氏について聞き取り調査を実施。



(6) 2019年6月10日：大妻コタカ生家（広島県世羅郡世羅町川尻）に於いて、旧久恵集落（現広島県世羅郡世羅町川尻）の元住民の方から大妻学院に残る古い写真について聞き取り調査。

併せて大妻コタカ親戚から熊田家について聞き取り調査を実施。



(7) 2019年6月11日：水谷邸（島根県出雲市今市町）および学校法人水谷学園（島根県出雲市西林木町）に於いて、大妻コタカ和洋裁縫女学校同窓生で出雲市に於いて女学校を創設した水谷キワ氏の孫で、1963年から3年間、大妻中高の英語教諭として勤務された方から聞き取り調査。



(8) 2019年6月22日：北九州市立商工貿易会館（北九州市小倉区古船場町1-35）に於いて、大妻コタカ親戚で広島県の高等学校卒業後1954年に上京し、大妻校舎内に住み大妻女子大学で学んだ方より大妻コタカの人物像を示すエピソードなどの聞き取り調査を実施。



(9) 2019年6月23日：博多サンヒルズホテル（福岡市博多区吉塚本町13-55）に於いて、大妻同窓会福岡会員複数名より聞き取り調査。

4人姉妹、5人姉妹ともに大妻で学んだ方々の進学の理由、寮生として墨水会の会に参加し、大妻コタカと一緒に詩吟を学んだ方からの聞き取り、大妻コタカの側近で大妻学院の発展に戦前戦後を通じ寄与した八女出身の甲斐田フチヨ（横山）氏についての予備調査を実施。



(10) 2019年6月23日：介護付き有料老人ホームフェリオ百道（福岡県福岡市）に於いて、戦時中在学した卒業生から寮生活、軍需工場での作業、学内工場の様子など聞き取り調査。



(11) 2019年6月24日：ホテルグランヴィア広島（広島市南区松原町1-5）に於いて、大妻同窓会広島・世羅会員、元給費生、大妻コタカ親戚から聞き取りを実施。

給費生として大妻への進学の間緯は、親戚関係や大妻コタカと親交のあった町の実力者を介して大妻に進んだと聞き取り。

大妻コタカの親戚からは、中学生の時から大妻コタカに東京へ呼ばれた方から聞き取りを実施。



(12) 2019年6月30日：メトロポリタン仙台「桃李」（仙台市青葉区中央1丁目1-1）に於いて、大妻同窓会宮城会員から卒業後社会的貢献をされている方々から聞き取り調査を実施。



(13) 2019年6月30日：仙台市市民サポートセンター1階マチノワひろば（仙台市青葉区一番町4-1-3）に於いて、防災教育を続けている方から、社会的貢献をされている様子を聞き取り。



(14) 2019年7月1日：せんだい男女共同参画団体エル・ソーラ仙台28階研修室（仙台市青葉区中央1-3-1）に於いて、1970年から4年間加賀寮の寮監として勤務された卒業生から、戦前戦後通じ大妻コタカを支えた品川モトメ氏・熊田みゆき氏・熊田陸氏・河村カタヨ氏について聞き取り調査を実施。



(15) 2019年10月3日：市川市男女共同参画センター『ウィズ』（千葉県市川市市川1-24-2）に於いて、大妻同窓会千葉会員から大妻コタカの教え、大妻コタカとの親交の様子、卒業後の社会で活躍した様子を聞き取り。



(16) 2019年10月5日：

大田庄歴史館（広島県世羅郡世羅町大字甲山159）に於いて、大妻コタカ記念会・大妻女子大学博物館主催、大妻コタカ先生顕



彰会共催，世羅町・世羅町教育委員会後援により「域携講演会 大妻コタカ～世羅が生んだ女性教育者～」を，一般財団法人 大妻コタカ記念会 井上小百合会長の講演により開催。

講演会に於いて，アンケートによる大妻コタカに関する調査を実施。

また，講演会開催について，中国新聞に掲載され，新聞をきっかけに来聴者を新しい聞き取り対象者として獲得した。

(17) 2019年10月5日：西上原上集会所（世羅郡世羅町大字西上原122-1）に於いて，広島県世羅郡世羅町甲山地区で，大妻コタカを継承するために甲山地区コミュニティ連絡協議会西上原コミュニティ推進協議会教育文化部主催の域学連携講演会「大妻コタカ～世羅が生んだ女性教育者～」を一般財団法人 大妻コタカ記念会 井上小百合会長の講演が催され，集まった方々から聞き取り調査を実施。



(18) 2019年10月6日：大妻コタカ生家（広島県世羅郡世羅町川尻）に於いて，生家で開催のコンサートに来場者から聞き取り調査を実施。

大妻コタカ実父小十郎氏の親戚に繋がる方々から聞き取り。



(19) 2019年10月8日：下関短期大学（山口県下関市桜山町1-1）に於いて，大妻同窓会福岡会員の紹介により，大妻の卒業生で1926年山口県下関市に女学校を創設した河野タカ氏について，河野タカ氏の親戚で大妻女子大学卒業生から聞き取りを実施。



(20) 2019年10月28日：伊那市防災コミュニティセンター（長野県伊那市西町5840）に於いて，大妻同窓会長野会員で1953年別科入学，

1954年短大に入学した方から，詩吟を通じての大妻コタカとの関わり，卒業後についての聞き取り。



(21) 2019年11月23日：長岡邸（広島県三次市栗屋町）に於いて，大妻コタカ親戚から聞き取り調査。

大妻コタカと長岡家の関わりへの深さ，大妻コタカの人となりの裏付けとなる調査を実施。



(22) 2019年11月24日：大妻コタカ生家（広島県世羅郡世羅町川尻）に於いて，三川ダム建築のために湖の底に沈んだ大妻コタカ生まれ故郷旧久恵集落の集い「久恵を語る会」が開催され，旧久恵集落の方々へ大妻コタカに関する聞き取り。



(23) 2019年11月25日：大妻コタカ生家（広島県世羅郡世羅町川尻）に於いて，大妻コタカの親戚で大妻学院の発展に戦前戦後を通じ寄与した品川モトメ氏について，親戚の方から聞き取り調査を実施。

併せて，甲山町で大妻コタカに協力した方の親戚から聞き取り。



(24) 2019年12月4日：一般財団法人 大妻コタカ記念会館（東京都千代田区三番町14-11）に於いて，大妻コタカ親戚の卒業生から，大妻コタカ親戚で大妻学院の発展に寄与した品川モトメ氏，阿久沢家および阿久沢源夫氏，長岡晃夫氏と大妻コタカとの関わりについて聞き取り。

併せて，大妻コタカと親交があった砂田治子氏（群馬女子短大元学長）について聞き取り。



(25) 2019年12月7日：神宮司邸（山梨県笛吹市石和町松本328）に於いて、1958年短大を卒業し結婚後、社会貢献された方へ聞き取り。



3. まとめと今後の課題

【まとめ】

本調査のまとめを以下の2項目に分けて記す。

I. 大妻コタカの子供教育に尽力した姿「給費生制度を通じて」、II. 大妻コタカの子供教育を受けた人がどのようなキャリアを積み大妻精神をどのように継承したか。

I. 大妻コタカの子供教育に尽力した姿「給費生制度等を通じて」

給費生制度については『大妻学院八十年史』（1989）に以下のように記されている。

「本学院には給費生という制度があった。これは郷里の広島県から向学心のある子女を苦学生として呼びよせ、手伝いをさせながら、自分の経営している夜学校に通わせるという制度である。当時長屋のような手狭な家に10人ほどの学生を寝起きさせ、頭はよいが経済的に大学に進学できない娘たちを受け入れていたのである。」

大妻の給費生制度は、家塾を始めた大正時代からあり、大妻コタカの子供の子女が1914年広島県から上京し大妻コタカと共に生活をした記録を同窓会誌『白ゆり』でみることができる。記録の一部を次に転記する。「土地の小学校を了へられた大正三年の秋十月笈を負うて校長先生の門を叩かれたのであります。當時は山階宮御邸内の一隅に大妻技芸傳習所を創設せられて少数の生徒に各種の技芸を教へになって居られたので、早天から深更まで薪水のわざはもとより何くれとなく忠実に校長先生をお輔けて、そのひまひまに技芸各科を修得されたのであります。」大妻同窓会校友部(1925)『白ゆり4号』。

大妻コタカの子供への聞き取り調査によると、大妻コタカが郷里に帰ってくる都度に「大妻に來なさい」と小さい頃から声を掛けられた方があった。また、今回の調査で大妻コタカの子供から戦前の卒業アルバムを拝借し、アルバム巻末掲載住所欄を調査した結果、「校舎内」と記載されている方は大妻コタカの子供・縁戚関係の子女が多く、

大妻コタカと生活を共にして大妻で学んだことを示していることが解った。

現在の広島県立上下高校（広島県府中市上下町566）にはかつて大妻に入学するための今でいう指定校制度があり、給費生として夜学に進学することができた。かつて聞き取り調査をした1956年に上下高校からこの制度を利用して給費生となった方によると、大妻コタカが上下高校に来て、良い生徒を大妻女子大学に送って欲しいと申し出があったことから始まった制度だそうである。

時代背景から、大学に進学する女子が少ない時代に東京に出て勉強ができ、大妻の給費生として学内に住まいを与えられ昼間は学内で働き、夜学で学ぶことができるのは安心安全で経済的救済率の高い制度であった。当時は2年制の夜学でも教員免許状を取得することができ、卒業後は郷里に戻り家庭科の教員として勤務されたとのことである。

安心安全で経済的救済率の高い入学システムは、上下高校以外からも甲山地区の有力者を通じ、大妻コタカの子供を受け給費生となり大妻で学んだ者もある。

このようなカタチで入学する給費生は志が高く、よく勉強をしたそうである。大妻コタカの子供ともなれば「大妻コタカ先生に恥ずかしくないように・・・」とより一層勉強に取り組んだのだと聞き取り調査でわかった。

2019年11月8日湯島天神参集殿（東京都文京区湯島3-30-1）に於いて開催された大妻コタカの子供世羅町を含めた備後地区6市2町（庄原市・三次市・神石高原町・世羅町・府中市・福山市・尾道市・三原市）出身者で構成する「東京備後の会」で、戦前は地元出身の大妻コタカの子供の学校に入学者があると、「万歳三唱」をして見送ったのものだと地元出身者に伺った。東京の大妻で学べることは誇らしい事であったのだ。

元給費生の子供卒業後の進路は、大妻の助手、寮監、狭山台校寮の受付、郷里広島県に戻り家庭科の先生、甲山町大妻女子専門学校の先生、世羅高等学校の先生となりそれぞれに社会に貢献をしている。

結婚後仕事を辞め、子育てを終えた後、再びパートなどで勤め始め、経営不振の会社を引き受け社長としてその会社を何倍も大きくした方もあった。

大妻コタカが東京で学校を開いたことにより大正時代から郷里の子供たちの多くが大妻で学び、

大妻コタカの教えを身近で学び、身の丈を大きくしてもらい社会に貢献した姿は、大妻コタカの女子教育に尽力した姿の一つであるといえる。

II. 大妻コタカの教育を受けた人がどのようなキャリアを積み大妻精神を継承したか

大妻コタカの教育を受けた方々がどのようなキャリアを積み大妻精神をどのように継承したかをこれまでの聞き取り調査を一部含めて記す。

1. 高見ふみ江氏

大妻コタカの言葉「日常が前進である」



写真1

て、長野県伊那市出身をキーワードに大妻同窓会長野会員へ調査の協力を求めた。結果、2018年になり高見ふみ江氏の親戚に辿り着くことが出来た旨の連絡を受けた。

聞き取り調査の結果、高見ふみ江氏は、長野県立伊那弥生ヶ丘高校の前身である伊那高等女学校を卒業後、代用教員を経て現在の信州大学教育学部に学び、母校の伊那高等女学校の先生の勧めにより1943年4月、25歳で大妻第二技芸（夜間）別科の師範科（2年制）に入学し大妻コタカと親交を持つようになったことがわかった。



写真2

戦後1949年、伊那市駅の近くで「高見洋裁技芸専門教室」を開設され、『大妻技芸研究会長野県支部』と大妻と名前の看板も掲げている（写真2）。

戦後の荒廃から復興に踏み出した1945年から1954年までの10年間は、日本に於いて洋装化に向かう洋裁学校興隆期といわれ、まさにその期間に高見ふみ江氏は教室を始めている。

高見ふみ江氏親族への聞き取り調査から、高見

ふみ江氏は、新しい技術を求めて足繁く東京に出て研鑽を積み伊那谷の女性たちに新しい洋裁・手芸を伝えていたそうである。

高見ふみ江氏は大妻コタカが初代理事長を務めた財団法人日本編物手芸協会の南信支部として看板を掲げて指導をしている。



写真3

と伊那の高見ふみ江氏とその生徒たちと写真で、時には伊那から自分の教室の生徒たちを連れて東京へ勉強に来たことを示す写真である。

「広島快人伝連載10:女子教育の振興に尽力 大妻コタカ」『すこぶる広島：ひろしま県グラフ誌 Vol.10』1997年12月号、p.22 広島県広報室。では大妻コタカの人物紹介を次のように記している。

「近所の女性たちに教えた手工芸の手ほどきが、いつしか日本女子手工芸教育界を代表する大きな学校に発展した。」

大妻コタカは日本女子手工芸教育界を代表する者であると評されているのである。

大妻コタカの最晩年、逝去されるまでの学院外の社会的事績として、財団法人日本編物手芸協合理事長、日本手芸作家連合会会長、新装手芸学院長、ジューキ編物研究会会長に尽していた記録がある。

このことから伊那の高見ふみ江教室の生徒たちは、年に一度東京で日本女子手工芸教育界を代表する大妻コタカからの直接教示されたことは、自己研鑽の励みになっていたことであろうと推察される。

大妻コタカもまた度々伊那へ赴き高見教室の生徒への免許状授与式に立ち会っており、高見ふみ江氏は大妻コタカの絶大なる信頼を受け、大妻コタカの後ろ盾を得て伊那谷の女子教育に尽力されたことが分かる。

写真4は1958年8月に伊那市自治会館に於いて伊那毎日新聞後援で開催された高見教室全国編物手芸入選作品コンクールおよび展示会での写真である。

写真前列左から伊那毎日新聞支局長、伊那教育



写真4

員会課長, 伊那公民館長, 高見ふみ江, 大妻コタカと並んでいる。

大妻コタカは同会場で講演も行なっており, 講演の様子は, 伊那毎日新聞 1958年8月3日付1面に「日常生活が前進である」の表題で掲載されている。記事の一部を以下に示す。

「私は私達の日常生活が限りなき前進であると思います。今日どれだけ自分が前進したのか, その前進の過程を見たとき楽しいものであり, 一にも二にも前進ということが必要であるわけです。

ここに一つ手芸あみものについて見ましてもできた作品が形の上でどんなに美しくあってもその人の個性が活かされていないか, 真心がにじみ出ていないものは, 形の上では立派であってもなんの価値というものはありません。

その作品の出来ばえは優れていなくてもその人の真心と努力によって出来上がったものであれば, どんなにか人々の好感を呼ぶことでありましょう。

これはその人の精神的な修養ということが特に必要なわけですが, さてこうした心構えから技術という問題となるわけですが, 作ろうとするものが家庭の装飾, 部屋の配置などの工夫, またデザイン等も考えなくてはならないわけで, ここにも前進することが必要なわけです。今日から行われているこのコンクール発表会もこうしたお互の前進の中から生まれたもので, 見事な作品が沢山ありますが, まだまだデザイン, 装飾の点に技術の面を研究する必要があります, 今後の前進に期待するものであります。」

手芸に打ち込んだ大妻コタカは, 自身の体験を通じて, 手芸と人間形成との関係がいかに強いかを学びとり独自の手芸哲学があり『婦人倶楽部』1931年6月号においても次のように記している。

「手芸はどんな大きな, むずかしい手のこんだものでも, 一つずつ積み上げて行かなければならない。しかし努力しただけ, はっきり形となって現れるのであるから, したがって知らず知らずに

勤労の習慣がつく。

なお手芸は最後の仕上りを楽しみに一心不乱に努力を続けて行かなくてはならない。一度に早くして仕上げてしまうことも, また手をぬくことも, 仕上がりを悪くする。それゆえ一步一步落ちて仕上りなくてはならない。このように手芸の実習は, 女子には殊に大切な精神の落ち着きを知らず知らずの中に養うものである。

また, 自分で苦心して作ってみてはじめて, ものの値うちがわかるもので, 手芸をやっている中に, 僅か一本の糸でもそれを有功に使えば, 花となり葉となり, 決して無駄に出来ないことをさとする。それに他人の作ったものに対しても, その苦心や勤労に十分同情が出来, 心から感謝することが出来るものである。」



写真5

高見ふみ江氏はこうした大妻コタカの精神を踏襲し, 1969年には大妻コタカを招き高見洋裁技芸専門教室は創立20周年を迎えている(写真5)。

日常生活が限りなき前進であるとするコタカの教えは, その後の高見ふみ江氏の活躍からも見ることが出来る。高見ふみ江氏は, 高見民俗民芸人形研究所を創設し, 日本民族民芸人形家元として活躍の場を広げていく。



写真6

日本民族民芸人形家元としての活躍は, 1970年代にサロントーク型ワイドショーとして人気を博したフジTV小川宏ショーなどで紹介された(写真6)。



写真7

また, パリのフランス国営放送局主催手芸美術展など海外に招かれ紹介され, やがて文化的交流も深ま

ってゆき, 岡本太郎氏などとも親交をもったのである(写真7)。

高見ふみ江氏のこの活躍ぶりは, 大妻コタカの「今日どれだけ自分が前進したのか」の精神を具現しているといえる。

高見ふみ江氏の社会的貢献として、戦後（昭和20年代後半）大学進学を希望するも「女に学問は無用」、「スレた女になる」、「嫁に行けなくなる」、「東京でひどい目にあう」など親や親戚中に反対をされた伊那谷の女性（金澤喜美子氏）に大学進学への道を拓いたということもある。

金澤喜美子氏の親族への調査によると、長野県伊那郡箕輪村の旧家の長女として生まれた金澤喜美子氏は子供の頃から志高く医師を目指し勉学に励んでいたそうである。

高校を卒業後、大学進学を希望するも親や親戚に反対され、地元の洋裁学校に通っていた。しかし、大学進学の夢捨てきれず洋裁学校の先生であった高見ふみ江氏に相談する。

すると「大妻女子大学には合格者の中で推薦状を持つ希望者はさらに選抜試験を受け、合格した者のみが大妻コタカ宅で家事見習いを兼ねて下宿しながら勉強ができる。紹介状を書いてあげるので親の説得を」と高見ふみ江氏からアドバイスを受け、金澤喜美子氏は親の説得を開始する。

すると父親だけが理解し「これからの世の中は、女にだって学問が必要。親として娘が見知らぬ街で独り暮らしをするのは心配。大妻先生の自宅に置いていただけるのなら許す。」

金澤喜美子氏は大妻女子大学の受験に合格し、選抜試験も突破し大学進学の道を叶えた。そして、娘の進学を応援した父親は、米国GHQの政策により農地を奪われ、決して裕福とはいえない状況の中で所有する山の木を切り出し、娘の学費としたと、金澤喜美子氏の親族への調査で分かった。戦後の動乱期に大妻で学んだ方の貴重な記録である。



写真8
写真8
コタカ記念会に所蔵の大妻コタカのアルバムに遺されており、今回の高見ふみ江氏の調査を切っ掛けに写真の来歴が判明した。

写真8は1955年12月、大妻コタカと高見ふみ江氏が長野県の金澤家を訪ねた折りの写真である。

この写真は一般財団法人大妻

2. 藤江道子氏

大妻コタカの言葉「進んで人のために」



「ズボンをすり降ろして歩き、地べたに座り込む少年たち。人ごみで菓子を食べて、化粧をして大声で下品に笑いたてる少女たち……。それを見て見ぬ振りをする大人たち。「恥を知れ、他人の迷惑を顧みず、民主主義を自分本位

と勘違いしている。このまま進めば日本はどんな国になってしまうのか？」藤江道子（2009）「若者の荒廃・親の世代に訴える」、『ふるさと61号』2009年9月10日、p100。

若者の荒廃に危機感を感じた藤江道子氏は、2003年仙台市に「次世代を育てる会」を発足させている。

藤江道子氏は東京で生まれ育ち大妻中学校、大妻高等学校で学び1953年に卒業。他大学へ進学され、結婚後宮城県仙台市に移住。

自身の子供を通じ知り合った外国人留学生家族から刺激を受け、子育てに区切りが付いた頃、自分なりの活躍の場を求めて社会貢献を始めている。

1977年4月に東北大学の支援団体である財団法人国際育友会に関わり、留学生たちの支援を開始された。

今のように組織的な国際交流や留学制度が無い留学黎明期だったため、留学生対応は何事も一つずつ試行錯誤し進めなくてはならず険しい道りだったようだ。

留学生は南米、韓国、インド、スリランカ、パキスタン、台湾、スペインから。台湾は日本と国交が無いために見ず知らずの留学生の保証人を引き受けたことも。対応した留学生たちは勤勉家の優秀な学生たちであったそうである。

生活上の相談で留学生を自宅に招き、日本人の普通の生活体験をさせ、時にはカラオケを唄い楽しいホームパーティを企画する努力をしている。

財団法人国際育友会10周年記念には、当時（昭和50年代中頃）中曽根康弘総理大臣が留学生10万人を日本へと指示された時で、中曽根総理大臣から直接訪問祝詞をいただくことができたそうである。

留学生に対する地道な奉仕活動を続けている時、仙台市長に依頼されて仙台市と姉妹都市のメ

キシコ合衆国アカプルコ市へメッセージとこけし人形と届ける大役を務められている。

奉仕団体である国際キワニスクラブから異国の母として表彰されたことがきっかけとなり、仙台家事調停委員の推薦を受け、家事調停委員を22年間勤めている。

その後仙台家事調停委員在任中に法務省少年院青葉女子学園の篤志面接委員に推薦され就任し、現在に至っている。

そして前述したように若者の荒廃に危機感を感じ、日本の若者の育成を考えて「次世代を育てる会」を設立している。

このように、役に立てるのであれば無料で奉仕する姿は、自身の家庭環境から学んだと言う。戦後の経済復興厳しい日本社会中で、家庭の主婦として祖母や母親が他人に手助けをする姿を見て、「自分より人」の大切さを学び、母校大妻の教育からも「進んで人のために」と大妻コタカ精神を学び身にしみておられるようだ。

人から信用され、種々「公」の事に推薦を受けて今日があるのは、金銭では得られない尊いものであり、推薦をしてくださった方々へは絶対恥をかけない、恩を忘れない、いづどこでどなたにお世話になるか判らないと心に誓われている。

自身の子供を通じ知り合った外国人留学生家族から刺激を受け、子育てに区切りが付いた頃、自分なりの活躍の場を求めて社会貢献を始められ、一つ一つの事業に謹厳に向き合わせ誠実に対応されている。

この藤江道子氏の社会貢献の姿から大妻コタカの姿を思わずにはいられない。

社会貢献の褒章として、1990年仙台家庭裁判所所長賞受賞、1991年国際キワニスクラブ社会公益賞受賞、2004年仙台高等裁判所長官賞受賞、2006年最高裁藍綬褒章受賞、2008年法務大臣賞受章、2010年全国篤志面接触協議会会長賞受賞、2016年法務省藍綬褒章受賞などをいただいている。

現在も早稲田大学社会安全施策研究所招聘研究員として活躍をされている。

3. 神宮司昭子氏

大妻コタカの言葉「静かな実行家」

神宮司昭子氏は、政治家（県知事）であり大妻コタカの信奉者であった父親の勧めにより、山梨県から大妻で学ばれ、1957年に大妻女子大学短

期大学部を卒業。

短大を卒業後、地元の山梨に戻ると直ぐに父親の選挙の時を迎えていた。折り悪く母親が体調を崩して伏してしまい、年上のきょうだいも子育て等で手が離せず、結果、短大を卒業したばかりの神宮司昭子氏が街頭で「おねがいします」と頭を下げて選挙の応援を行うことになったそうである。

若い女性が公の場で活動することは希な時代で、とても勇気のいることだったに違いない。

最初は「お願いします」とだけしか言えなかったが、回を重ねるうちに他にも話せるようになり、選挙応援を無事成し遂げられたとのこと。

大妻コタカ（1957）「身につけるもの」『ふるさと』8号で、以下のように記している。

「今まで多くの女性に欠けていた自分に対する信頼感、自己の発表意欲といったものをこれからの人たちは身につけなければなりません。自分をあきらめて他に先を譲ることは、ある場合には必要かもしれませんが、せめて若い時代には、大いに外に向かって自分を進ませて見る必要があると思います。

失敗すればそれが一つの体験になります。一番大切なことは、それにくじけないだけの勇気が欲しいということです。同じような目的に燃えた仲間と語ることによって、多くの先輩の進んだ道をしることによって、知らず知らず内的に充実した成人に伸びて行きます。

私は、随分あらゆることに頑張ってきたつもりですが、今になってふりかえってみますと、もっと、自分を試みるべきだったと、くやむことが沢山あります。ですから可愛い子どもたち（教え子たち）に、私に代わりに、うんと張り切って、若い時代を充実してもらいたいと望んでいます。」

まさに短大を卒業後直ぐ、経験もなく公の場で選挙応援を成し遂げた神宮司昭子氏の姿は、大妻コタカの「身につけるもの」の教えを具現しているといえる。

この大妻コタカの「身につけるもの」の教えの経験は、神宮司昭子氏が結婚後、1960年代男性中心の税務関係法人会に女性活躍の場を設けることを目的で「法人会女性部会創設」を目指していた税務署から声を掛けられることに繋がっていく。

創設に尽力し、法人会女性部会において女性目線で企業を考え、女性の経営者の横の連携を育む

経営者婦人フォーラムなど開催へと発展させている。



2018年4月には「法人会全国女性フォーラム山梨大会」では県連女連協会会長として、2000人の会を開催している。

また、長年ガールスカウト山梨県連盟にも関わり、人権擁護委員、教育委員なども歴任。

教育委員の折には、地域の小学校増設にも関わられている。大妻同窓会山梨代表も務められ、休むことなく大妻コタカの教えどおり「静かな実行家」として社会貢献をされている。

4. 植野邦子氏

大妻コタカの言葉「人の和」



植野邦子氏は1965年大妻女子大学短期大学部を卒業。

結婚後家庭の主婦として、地元広島県東広島市において大妻で学んだ良妻賢母の精神を基に、福祉活動のリーダー・民生児童委員の一人として社会貢献された。

社会貢献された。

「困っている人を放っておけない」と28年の長きに亘り地区の困り事の解決に細やかな目線で率先して当たられた。

母子家庭の子育てや就労問題に向き合い「私は言い出しっぺなだけで、いつも地域の協力があった」と謙虚に振り返られる。

保育所への送迎が出来ない家庭に、住民のローテーションを組んで送迎を手伝うなどの発想力、判断力そして行動力は、台所を取り仕切り、家族の健康を預かる主婦ならではある。

高齢者の見守りにも気を配り、一人暮らし家庭の訪問を提案され、家で倒れていた高齢女性の救出につながったケースもあったそうだ。

民生委員を退かれた今は、自宅で開くサロンで高齢者や子どもたちが集まり、おしゃべりや勉強、手芸や料理をみんなで楽しまれている。

植野邦子氏の活動は、家庭に職場に、広い狭いにかかわらず「和」を土台にして人と人との関係を結ぶことが大切で、清く正しい愛情でほのぼ

のとした美しい人の和を創ることは平和な社会を構築する幸福への鍵であるとした大妻コタカの言葉「人の和」を具現している。

なお植野邦子氏は社会貢献の褒章として、2015年に藍綬褒章を受けている。

5. 長谷川道氏

大妻コタカの言葉「いつでも何処でも、何からでも学べ」



長谷川道氏は1961年大妻女子学家政学部被服学科を卒業後、地元新潟県で家庭科の教諭となり、結婚後は子育てもあり非常勤講師として勤務。

非常勤となったことで家政科の専門家として地元の村史

編纂調査員に選ばれ、1975年から村史編纂委員会調査執筆委員を務め、古老から昔の習俗などを聞き取りし、まとめる仕事をしている。

そのほかに村連合婦人会長、社会福祉法人県央福祉会評議員、民生児童委員なども地域の努めリーダーとして活躍。

加えて新潟家庭裁判所の調停委員、家事調停委員、民事調停委員、簡易裁判所司法委員も務められて公のために尽力された。

家事と民事の調停委員となってからは、法律の基本知識の必要性を感じ、1986年4月に中央大学法学部通信教育学部に入学し、1991年3月に同大学を卒業し研鑽を積み、1992年4月からは新潟中央福祉専門学校で講師を務めるほどになっている。

『いつでも何処でも、何からでも学べ』と、大妻コタカの「学校を一步出ますと定まった先生による教育はありません。これからは、実生活の周辺から、心に触れ目に映るすべてのものに心身両面の糧として、生活の智慧を汲みとることに心がけましょう。」の教えの実践である。

長谷川道氏は、学ぶことと教えることの繰り返しの人生の中でその両方から得た知識や経験が生かせるのが調停委員の仕事だと言う。

家事や民事の問題は人と人のかかわり。調停に当たるときはいつも、人と人との関わりとは何か、家庭とは何かといった基本から考えるのだそうだ。

どんな人でも素晴らしいものを持っている。この人から学ぶことはできるのだろうかという視線

で接することで、先入観を持たずに相手に接することができるのである。

相手の素直な心を引き出すには、まず自分のお粗末なところからさらけ出すこと。知識も経験も必要だが調停員として一番大切なのは人柄。人柄は偽り続けることはできないので、自分のお粗末なところを見せた方がいいのだと言う。

家事調停になったのは40歳のときで、調停を受ける相手が自分よりも年上のことがあったが、村史編纂で古老から聞き取りをした経験が大いに役に立ったのである。

また、人は自分の都合のいいように事実をゆがめて解釈することがあるが、相手の本心を見抜くコツは、ろう学校の高校生たちから学ばせてもらったそうである。

ろう学校の生徒たちは耳が聞こえず、言葉も話せない子がほとんど。あの子たちは、こちらが心にガードを張っていたら絶対に心を見せてくれない。心を開いた相手には目や表情や手、足の動きで必死に自分の思いを伝えようとするので、接しているときは一瞬も気が抜けず、相手の表情全てに目や耳を傾ける習慣がつくのだそうだ。

ろう学校の生徒たちから誰もが何か素晴らしい能力を持っていることを教わり、当たり前であることの幸せも教わったのだそうだ。

長谷川道氏は体験を通して大妻コタカの教えの『いつでも何処でも、何からでも学べ』を伝えてくれた。

長谷川道氏は新潟県三条市に400年続く旧家の出身で、人の出入り多い家庭生活の中で厳しく躰を学ばれている。

また母親も大正時代に大妻で学び家庭科の教諭をし、結婚後は自宅で裁縫教室を開き地域の女子教育に貢献をされている。

なお長谷川道氏は調停委員功績として、2001年に藍綬褒章を受けている。

6. 河野タカ氏

大妻コタカの言葉「らしくあれ」



河野タカ氏は大正時代に山口県下関市で河野高等技芸院を創設し、戦後の教育改革で、中学校、高等学校、幼稚園、短期大学を創設。大妻コタカ同様に生涯を女子教育に捧げた。

その経歴は、1891年現在の山

口県下関市彦島で生まれ、1910年彦島実践女学校を卒業後、学校へ行った女はダメだと言われないうちに社会実践として7年間家業の農業に従事。その後、地元で女子の専門教育を実現させる志を立て1917年26歳で東京へ。

学習院大学の前身である華族女学校に1896年より和裁を教えていた武田太郎吉氏が、1909年に創設した武田高等女学校専攻科で和裁を学び、武田太郎吉氏から「大妻の手芸」が良いと勧められ1919年に大妻の手芸を習得している。

1920年に武田高等女学校教師として就職し、教員生活の第一歩を踏み出し、1925年に地元に戻り、1926年河野高等技芸院を創設。

箸ひとつ無いところから女子教育を始め、経営はもちろんのこと校庭の手入れ（拡張整地、植樹、花壇造り）、苦学生や寮生の生活指導、菜園作り、ときに管理人の仕事までも日夜、学内に住み仕事をしながら女子教育に尽くしている。

戦後は中学校、高等学校を開校し、1950年には幼児教育の重要性を認識し、市内唯一の私立幼稚園を開設。1962年には下関女子短期大学家政科を創設している。

短期大学創設のため東京に上京の折には、大妻コタカにアドバイスを求めている。また、自身の学校には短期大学しかないため、同短大を卒業した養女河野光子氏を1964年大妻女子大学家政学部へ編入学させている。

編入試験を受け大妻女子大学家政学部3年次に入学した河野光子氏は、和裁が上手だったと同級生が語っている。

大妻コタカの教えに「らしくあれ」があり、らしくあれ」について「断想」、『大妻学院報』1953年4月に以下のように記している。

「人間らしい人間、女性らしい女性、そしてあくまでも自分らしい個性を持った自分を養い育てていきたいものです。

まさに、身を変じて、その都度それらしくなるにしても、それは外に現れた化身であって、根本にはいつも変わりなく輝いているところの個性がなければなりません。

まず、立派な個性を作りつつ、それが、立場に応じ時に従って「らしく」現れるようにしたいものです。」

河野タカ氏もまた「らしく」を「良志久」と漢字を当て生徒、学生たちに教えている。

1983年に開催された下関短期大学の卒業生座

談会資料には、卒業生のコメントとして、「らしく」生きることを頭におきなさいと教えられ、その教えは今でも立派に生きていと記している。



1963年、河野タカ氏は私学女子教育に永年尽力した功績により藍綬褒章を拝受している。

明治、大正、昭和と戦争の厳しい時代を通じ、質素な生活の中で、女性一人で教育一筋に進んだ河野タカ氏の姿は、大妻コタカ同様に偉大である。

そして、大妻コタカの言葉「らしくあれ」が、大妻を卒業した河野タカ氏によりその教え子にも生きる指針として受け継がれていることは、大妻精神の継承と具現である。

参考文献

高垣佐和子・泉良子（1997）「コタカ先生からあなたへ」財団法人大妻コタカ記念会誌『ふるさと』50号。

高垣佐和子（2015）「戦時下の大妻」一般財団法人大妻コタカ記念会誌『ふるさと』67号。

高垣佐和子・井上小百合（2017）「大妻家のルーツ 一大妻家と大祝諷方家の関わり 序章」一般財団法人大妻コタカ記念会誌『ふるさと』69号。

高垣佐和子・井上小百合（2017）「大妻教育のルーツ ーコタカ先生のふるさと 世羅ー」一般財団法人大妻コタカ記念会誌『ふるさと』69号。

高垣佐和子・井上小百合（2017）「コタカ先生の言葉 50編」Web版。博物館HPにアップ。

高垣佐和子・井上小百合（2018）「回顧 大妻良馬先生」一般財団法人大妻コタカ記念会誌『ふるさと』70号

高垣佐和子・井上小百合（2018）「あなたの知らない大妻の歴史」一般財団法人大妻コタカ記念会誌『ふるさと』70号。

高垣佐和子・井上小百合（2019）「大妻神社氏子会と大妻良馬先生・大妻コタカ先生との関りについて」一般財団法人大妻コタカ記念会誌『ふるさと』71号。

【今後の課題】

これまでの調査研究により、大妻の教えは、卒業生および大妻コタカと関わった方々のその後の社会貢献の姿から、大妻教育は社会に歓迎され役に立っていることを明らかにしてきた。

2020年となり大妻コタカ没後50年を迎えた今、大妻コタカと関わった方々も高齢となり、大妻コタカに関する聞き取り調査もいよいよ時間的猶予が無くなってしまった。

ひとりでも多くの大妻コタカと関わった方々から聞き取り調査・実地調査を実施し、大妻コタカの教育を受けた方々がどのようなキャリアを積み、大妻精神をどのように継承したか、大妻が社会に果たしてきた役割を一つ一つ紡いでいくことを、継続的に、倦まず弛まず調査を進め、大妻精神を継承し発展させてゆく必要がある。

そのためには、新たな聞き取り対象者獲得方法を工夫をし、推し進めていく必要がある。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（K1923）をうけたものです。